鷗形也、

〔茶道筌蹄三〕同取炭○小道具

釜置　紙は美濃紙一尺一寸に、横七寸五分を四ッに折也、

同組物　紹鷗所持の寫し、本哥は竹浪庵にあり、唐臼のへダテなり、江岑の箱書付、原叟の折紙、啐啄齋の極書付あり、藤組は紹鷗所持の卜組に習て利休形なり、卜組は玉縁あり、藤組はなし、此釜置千家より江戸冬木氏へ傳へ、當時は竹浪庵の所持と成る、稻垣翁事

同竹　元伯好、大竹の節の所を用ゆ、

同板　利休形、箱炭とりに用ゆ、桐の角切なり、

〔茶道要錄上主法〕釜之事同水遣具

一釜置之事、組物ヲ用ユ、本圖アリ、炭斗ノ上ニ置時ハ、表ヲ上ヘシテ置、其マヽ取テ空手ヘ取替ル時、上ヲ下ヘシテ置、裏ニ釜ノ底ヲ可付、又揚ル時下ヲ上ヘシテ炭斗ヘ入、其上ニ鐶ヲ置ベシ、常用ルニハ桐ヲ以テ作ル、寸法別ニ記アリ、末派ニ好メル花形樣ノ物必不用、炭斗小シテ難載、則紙ヲ四半ニ折テ懷中シテ用ニ此紙、折目ヲ客前ヘナシ、二方ノ切目ヲ勝手ノ方ヘスベシ、釜ヲ掛テ後ニ懷中スルナリ、末流ニ釜置ヲ釜敷ト云リ、誤レリ、

〔茶傳集九〕一釜上紙、長五寸三分、幅四寸九分、四ッに疊テノ寸也、紙數十二枚、

凡右の寸也、釜の大小によるべしと被仰候、

〔槐記〕享保十二年正月廿四日、參候、釜シキノ紙、一通リカマシキトテコレアリ、半紙ヨリハ大ニ、美濃ヨリハ小ク、少シアツキモノ也、ソレヲ四ツニ折テ、十九枚ヨリ廿一枚マデノモノナリ、紙ノ厚薄ニヨリテ紙數ノチガイアリ、直シヤウハ、紙ノ重リタル方ヲ先ト勝手ヘナルヤウニ、折目ヲ客付ト我方ニナルヤウニ置コトナリ、ナゼナレバ、釜ガ置サマニ、タヽクレヌヤウニトノコト也、